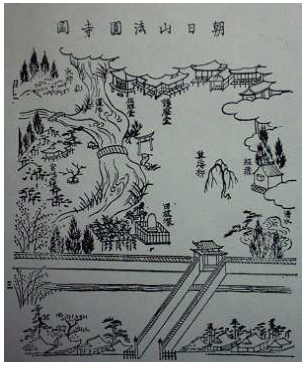
法圓寺芭蕉翁追善「田植塚と句碑」

享保四年頃の法圓寺境内



享保四年（一七一九年）五月十二日に芭蕉が須賀川で詠んだ句の真蹟を法圓寺境内に埋めて「芭蕉翁」と刻んだ塚を立て供養した当時の法圓寺境内の様子
享保四年発刊
俳諧『田植塚』より

東北最古の田植塚（芭蕉翁塚）

法圓寺
田植塚
享保四年（一七一九年）五月十二日に建立

昭和四十二年
桑折町文化財記念物指定

由来　当時桑折本陣主人であった佐藤佐五左衛門（俳号馬耳）が**須賀川で詠んだ芭蕉の句の真蹟を法圓寺境内に埋めて「芭蕉翁」と刻んで石塚を立て供養した。**さらに、俳諧『田植塚』乾坤を発刊した。「乾」の巻きは、馬耳に自序、無外坊燕説の「田植塚記」追善興行　一人一句（計三十六句）手向の句三七四句。「坤」の巻きは、露沾子の句を発句とし、「孫太郎虫説」「扇箴」のほか四季八句の表合の連句、歌仙二、および露川の跋で締めくくってある。

法圓寺　現在の田植塚全景

●芭蕉の句碑
「風流の初めやおくの田植うた」
俳聖芭蕉翁真蹟
（向かって右前の石）

●「芭蕉翁」田植塚（央）

●俳諧『田植塚』の「法圓寺境内図」と「田植塚記」（向かって左前の石）

風流の初めや　おくの田植うた
芭蕉
（芭蕉真蹟）

平成十五年五月十五日
当山二十世好久・斉藤謙建立奉納

天野桃隣行脚の図

芭蕉の弟子（芭蕉の甥）天野桃隣は元禄九年芭蕉翁三回忌追善のため奥の細道を行脚し、田村不碩宅を訪れ、法圓寺のことを俳諧紀行文『無都遅登理』に「仙台領宮嶋の沖より黄金天神の尊像、漁父引きあげ、不思議の縁により此処へ遷せたまひ、則朝日山法圓寺に安置し奉る。云々」と紹介しています。

石突に　雨は止みたり　花柘榴
桃隣

絵　宮尾しげお画伯

田村不碩句碑

咲つめて　是も悔いあり　花葵
不碩

田村茂左衛門房寿（俳号不碩）は岡村不トに師事し中央俳壇で著名になり、桑折俳壇を一躍有名にした人物。宝永八年三月二十三日没

昭和五十六年十二月二十七日
桑折町文化財保存会句碑建立奉納

佐藤馬耳句碑

釜ふいて　閑々無事や　年の暮れ
馬耳

当時桑折本陣主人であった佐藤佐五左衛門宗明（俳号馬耳）田植塚建。昭和五十六年十二月二十七日　桑折町文化財保存会句碑建立奉納

俳諧『田植塚』乾坤。寛延七年没。

法圓寺芭蕉翁追善「田植塚と句碑」

太田良平寄作「法圓寺の田植塚「芭蕉翁」供養」和二十八年「双華」が日展特選・朝倉賞、二十九年「修道女ヴィンセンチア」日展特選となり、以来日展審査員三回のほか三十六年日展会員、四十三年日展評議員、平成六年日展参与としてわが国彫塑界の重鎮として活躍。平成九年四月没。

寄贈者　太田良平・斉藤　謙

富安風生句碑

みちのくの伊達の郡の春田かな　風生

富安風生（謙次）（真蹟）

若葉主宰
昭和十一年逓信次官
昭和四十九年日本芸術院会員
昭和五十四年二月二十二日没　行年九十五歳。
斉藤家所蔵風生真跡の協力を得る。

黄鶴楼亡き　みちのくの温め酒　貞雄

三谷貞雄
富安風生に師事し、若葉入門。
若葉同人
風生の秘書を長く務める。風生没後清崎敏郎に師事。福島若葉会指導者。
平成十八年六月十四日没。行年九十九歳

三谷氏、俳諧『田植塚』を見て驚き、風生先生の「春田かな」の句碑は是非、芭蕉翁の「田植塚」の傍に置いておくべきとのこと。桑折町に俳聖芭蕉から現代の俳諧を代表する風生の蕉風俳句をつなぐため尽力した若葉同人斉藤黄鶴楼と親交があった。

南無大師遍照金剛　秋ふかし　黄鶴楼

斉藤庄左衛門（俳号黄鶴楼）
若葉主宰富安風生に師事。若葉同人
昭和十六年「陣屋」「稲荷」句会を主宰。
昭和三十一年桑折青柿俳句会を主宰。
昭和三十六年醸芳中学校中庭に風生の「春田かな」の句碑建立。桑折の俳諧の文化の高さを全国に知らしめる。
昭和五十六年十月二十八日没。行年八十歳
法圓寺十九世龍剛と親交、句会を催していた。
黄鶴楼最晩年、高野山で詠んだこの句を好久の恩師東京都清瀬市円通寺青木融光老師と法圓寺に献句したもの。

墨彩画　奥の細道　五十余点

米倉　兌（画）

米倉　兌

米倉兌履歴
大正二年四月十七日、福島市誕生
昭和七年　仙台商業卒業。神戸洋画研究所で浜田葆光に師事。併せて水彩画を別車博資に学ぶ。
昭和九年　二科展入選。以後、昭和十七年年まで、連続入選。以後、」
平成十四年まで前項各地の三越等で個展を開き続け、蕪村以降最高の奥の細道墨彩画かとして、著名な活動を繰り広げ、加藤楸邨等からも絶大な賞賛を得て、親交が深かった。
平成九年法圓寺『田植塚・おくの細道絵巻』を描き始めるも、
平成十二年八月三日、福島市で逝去（八十七歳）。
平成十四年『おくの細道絵巻』（未完絶筆）ほか五十余点の作品をご遺子・米倉みなとさんが、個人の遺志として法圓寺好久に奉納